

## 天譴論への疑問

どれほどのいとしい人を裂いたのか  
地の神の怒りまだ鎮まらず

これは、阪神大震災の際にある女性が詠んだ短歌である\*。だれもが家族や親しい友など、愛しい人を持っているのに、どうしてこんなにも多くの無辜の命が奪われなければならなかったのか。大地の神は何を怒っているのか。慟哭の中で神にやりきれない思いをぶつける。この歌には、かくも無慈悲な所業でその怒りを表した神に対する、生身の人間の問いかけが込められているようだ。

大災害が起こるたびに、巷間まことしやかに語られるのが天譴論である。天譴論とは、自然災害を天（神）が人間に下した譴責であり、罰（天罰）だと見なす考え方である。今日、これを公の場で語れば不謹慎のそしりを免れない。科学的根拠がどこにもない上に、何よりも犠牲者を道徳的に責め立てる、それこそ無慈悲な議論になるからである。

けれども、天譴論にも一抹の真理がある。それは、我々人間の側にも責められるべき点がやはり存在するからである。我々の現代文明は、自然の収奪と破壊の上に築かれている。我々が享受する豊かな暮らしも、いったん事故が起これば危険さまりない原子力発電に頼っていたりする。もし天（神）から譴責が下されるとすれば、また我々自身が猛省しなければならないのは、そのような我々の現代文明のあり方であり、この文明的な生活様式なのである。

ただ、このことを認めたとしても、なお割り切れない思いが残る。一体なぜ無辜の人々が犠牲にならなければならなかったのか。愛しい人の肉体が、人と人との関係が、こんな不条理な仕方では引き裂かれてよいものか。それはなぜ、なぜなのか。神は一体、何を考えておられるのか。こうした問いを突き詰めていけば、ついには神の存在理由を問うところまで深められていく。万能で至善な神がいるのに、この世にはどうして苦悩や悪や不幸が存在するのか。神は何ゆえにこれらの存在を黙って見許しているのか。

実をいえば、古来より人類はそのような問いを問うてきたのだった。神義論（弁神論）という形で提起されてきた問題がそれである。

## 神義論の不満足

神義論には様々なものがあり、古くには信仰厚き義人の苦しみの意味を問いかけた旧約聖書のヨブ記があるが、ここではよく知られたライプニッツの予定調和の神義論を取り上げてみよう。神はさまざまな世界(宇宙)を構想することが可能であるが、現実存在しているのはこの世界だけである。神は万能で至善なるがゆえに、存在する唯一の世界であるこの世界は、神が最大の善意をもって創造した世界である。つまり、この世界こそ、他の可能な世界に較べて、最善の世界なのである。どんなに理不尽な出来事や悪しき災難が起こったとしても、それは恩寵という高次の目的にいたる手段に過ぎず、一切は予定調和的に存在すると見なくてはならない。

これがライプニッツの最善説と呼ばれるものである。なるほ

ど、たしかに理屈としては筋が通っている。でも、現実の大災害を目の当たりにしたとき、果たして人はこれで納得できるだろうか。彼は1716年に死去したが、その約40年後の1755年にリスボン大地震が発生した。地震とそれに続く大津波のために首都リスボンをはじめ、ポルトガルの多くの都市が壊滅状態になり、6万人を超える犠牲者が出た。

リスボン大地震は、当時のヨーロッパの啓蒙主義的な思想界にも衝撃を与えた。「最善説とは、うまくいっていないのに、すべては善だと言い張る血迷った熱病だ」。そう皮肉を込めて、ヴォルテールは、『カンディード』の中でライプニッツ流の楽観論的な神義論を批判している。

## 内なる倫理的な神の体験から

こうした神義論が我々を不満足にさせる理由は、そもそもこの世界の不条理を合理的に説明することの根本的な困難性にある。このことを最もよく見抜いていたのが、実はシュヴァイツァーなのである。彼は牧師としても務めていた若い頃、堅信礼を受ける少年たちに、宗教は一切を解明するものではないと語った。その後、第一次世界大戦が勃発し、ヨーロッパ全土が殺戮の修羅場になった。戦後になって彼は、この不条理な事態に直面しても信仰を捨てずに済んだと、成長した少年たちから感謝されたという。

苦悩と悲慘に満ちた、あるがままの世界を虚心坦懐に受け取れば、その認識はどうしても悲観論的なものにならざるをえない。一方に生命の有意な創造があれば、他方に生命の無意味な破壊がある。創造する神は同時に破壊する神でもある。世界の単純な楽観論的な解釈は、不可能と言うべきである。

そして宗教を測る究極の尺度もまた、そんなところには存しない。それはむしろ、人間をいかに生き生きと倫理的実践に促すかどうにかかっている。シュヴァイツァーは、我々の内において体験される倫理的人格たる神（愛の神）こそが、そうした倫理的なエネルギーを発動すると主張する。この内なる愛の神の体験は、哲学的な言い方をすれば、我々の内なる生命への畏敬の体験としても説明できる。倫理的人格としての愛の神と自然の力としての神（創造の神）は、たしかに神としては同一の存在であるが、その関係は我々にはどこまでも謎のままである。

むしろ我々はこの絶対の謎を認め、ただひたすら自らの内に神秘的に宿る倫理的意志としての愛の神、別言すれば愛の意志としての生命への畏敬にのみ拠って立つべきである。なぜなら、我々はそこから尽きることなく倫理的に実践するエネルギーを汲み出すことができるからである。そして、どんなに世界が苦悩と悲慘に満ちていても、懐疑主義や無神論に陥ることなく、我々は自他の生命のために主体的な献身を行うことができる。そしてこれこそが愛の神の命法なのである。

東日本大震災という未曾有の困難にあっても、我々はそのように自らの内なる倫理的意志にひたすら依拠し、生活の復興と人生の再建に尽くしていこうではないか。そのための倫理的エネルギーなら、神はこれを無限に供給してくれるのだから。

\*伊賀上和美氏（松山市）の作。朝日新聞歌壇俳壇編『阪神大震災を詠む』（朝日新聞社、1995年）より。